

パーニュ女性考

原口武彦

東アフリカのケニアを訪れたとき、同じアフリカでもやっぱり西アフリカとは違うのだとおもったことの一つに女性の服装がある。ケニアの首都ナイロビはいうにおよばず、近郊の農村地帯に入っても、女性は老若をとわずスカートをはいているのである。西アフリカのコートジボワールではおなじみの、パーニュ姿の女性はあまり見かけられない。スワヒリ語でパーニュにあたるカンガという語があるそうだが、植民地時代に五万人をこえるヨーロッパ人が入植したケニアのこと、西欧式のスカートがカンガをより完全に放逐してしまったのだろうか。

パーニュ圏と
ブルーブルー圏

西アフリカの熱帯雨林地帯の女性の典型的な服装は、今日でも、フランス語でいうパーニュ、ジュラ語でいうファニである。その広がりには、西はギニアあたりから、東はナイジェリア、さらにはザイールあたりまでか。西アフリカでは、西欧列強による植民地化前、サハラ砂漠をこえて渡来したイスラムが浸透した内



陸部のマリ、ブルキナファソ、さらにはセネガルあたりになると、パーニユにかわって、ブーブー（ジュラ語ではデレケバ）が主流となる。首と腕をおせるように裁断し、足元にまで達する長さの袋状に縫製しただけのこのブーブーはだぶだぶしているが、西アフリカの巨大なおばさんがまとうと威風堂々としてさまになる。ブーブーが風になびいたりしたとき、チラリみえることを予期して、刺し子などをほどこしたしゃれた腰巻を下につける。

さてパーニユの方は、一般には一〜二メートル幅の綿布を、長さ六ヤードに裁断して売っている生地そのものも、パーニユ、あるいはファニと呼んでいることからわかるとおり、衣服として仕立ててある要素は少ない。十九世紀末、フランスの探險家バンジエールが西アフリカを踏査したときの記録などをみると、上半身は裸で下半身も日本の越中ふんどしのようなもの、あるいは腰巻をまいただけの格好の女性の姿が描かれている。ほとんど一年中、蒸し暑い西アフリカの熱帯雨林地帯では、衣服をまとう慣行が一般化したのは、ごく最近のことのようにおもわれる。今日でも、高層ビルが林立するアビジャン市からちよつと出て郊外の農村を訪れば、上半身は裸の腰巻姿で家事



に精を出す婦人の姿をみる事ができるし、また若い娘など気分次第では、その布地を胸の上までずりあげて、ちょうどアメリカ映画で見るシャワーを浴びたあとのバスタオル姿の女優さんのような格好で歩いている姿も見掛けることができる。

パーニユの 仕立て方と着方

これらすべてがパーニユあるいはフ
アニである。ちな

てみると「腰巻（アフリカ、アジアの原住民の）」と記してある。しかし、今日、アビジャン市でみられる女性の日常着としてのパーニユ姿には、一つの型ができてゐる。すなわち前述の六ヤードの布地は、さらに三つに裁断される。その一つを上半身をおおうブラウス風のものに仕立てるのが、今日では一般化したようである。仕立屋さんは、マルシェ（市場）の一角に小さな店をかまえているものから、ミシンを頭にのせて街中を巡回しているものまで万余とおり、仕立て料も競争が激しいせいにかきわめて安い。

のこりの二片の布地のうち一つは、布地のまま裾をかがただけで腰に巻く。腰巻というよりも巻スカートと呼ぶほうがふさわしい。問題は第三の布切れである。普通は、これを前述の巻きスカートの上に帯のように腰部に巻きつける。別にそれがゆるむわけでもないだろうに、パニーユ姿の女性は、人前でもしよっちゅうこの帯を解いて締め直す。西アフリカの女性の女らしい仕草といったら、私はまずこの仕草をあげる。まだ十歳くらいの少女が、母親の見よう見真似でこの仕草をする。とてもおしゃまな感じで愛らしい。この第三の布切れは、転じてその女性の頭を飾ることもある。工夫をこらして、あるときは姉さんかぶり風、またあるときはねじり鉢巻き風と、大胆に頭部を飾る。

乳飲み子をもつ母親の場合には、転じて負ぶい紐となる。こんな布切れだけでよく赤ん坊が落ちないものだと感じるが、これはみごとに隆起した母親のお尻のおかげである。いわば母親の尻の隆起にまたがって落下する心配のない赤ん坊を布切れ



は補佐しているだけなのである。マルシェで商いにはげむおばさんたちにとって、この布切れはさらに転じて日銭を貯える財布となる。筒状に縫った帯の中には、小さくまるめた紙幣が詰め込まれている。同じ模様の布地なので、これを腰に巻き付けていると、そのありがが判別しがたく、賢明な盗難予防策にもなっている。

機能性とおしゃれ度

このように多様な機能を未分化に集約しているパーニユは、やがてケニアのナイロビのように西欧風のスカートに席を譲ることになるのだろうか。

日常着としては、たしかにあまり機能的にはみえない。小学校の女生徒の制服はすでにワンピースである。しかし、西アフリカの女性にとって日常の一部ともいえる踊りの際には、パーニユの方がぴたりくる。やや前屈みに腰をつきだし、足をこきざみに踏み鳴らすことを基本型とするこの土地の踊りにはパーニユ姿の方がずっとさまになる。

とにかくパーニユには型の差異があまりないから、女性のおしゃれセンスの勝負どころは、パーニユ地の色・柄ということになる。日本の繊維企業U社が合併で参加している現地のパーニユ地メーカーの話では、平均は一つの柄で、五〜六千メートル（パーニユ、千人分）といったところだが、ヒット柄になると、二〜三万メートルもプリントすることがあるという。その場合、たちまちそのイミテーションが、パキスタンあたりで作られ、この地に流入してくる。西アフリカの女性のまさに天与の色彩感覚相手のこの仕事もなかなか厳しいようだ。

（はらぐち たけひこ／アジア経済研究所アフリカ総合研究プロジェクト・チーム・コーディネーター）